

叫び続けるのみに止まらず、和崎さんは第二号となつてゐる女に会い、すでに本妻のあることを知りながら、第二号となるなどは、女の恥であるとその不心得を説き、その足で男に会つて、蓄妾廃止をせまり、それまで自分の主人に女あるを知らず、巧みにごまかされていた本妻ははじめて知つて、和崎さんと一緒になつて廃止を自分の夫にせまり、別れざるを得なくなつたものもあつた。

矯風会の運動の一つとして蓄妾廃止に参加した婦人たちも、和崎さんのこの実行力には舌を巻くのみであつた。

婦人運動もまた幾つかにわかれたが、市川房枝、金子しげり氏は、専ら婦人参政権だけを自ざして、婦人参政権獲得期成同盟を組織して、地方に呼びかけ、秋田においても支部を組織した。その時の幹部は和崎ハル、小泉キクエ、湊ツネ田畑染、佐藤サダ、菅久子、大島シユン吉田照代、早藤松野、内藤セイ、伊達昌代の諸氏が名をつらねてゐる。

昭和五年四月、東京において第一回全日本婦選大会を開いたとき、和崎さんが秋田を代表して出席した。あの大きい声の秋田弁でまくし立てて人目をひいたと見えて、婦選同盟の機関誌に漫画まで掲載されたほどである。そして第三回全国大会が秋田において開かれたのであつた。こうして美容院の和崎から、婦人運動の和崎となつて、秋田婦人の深い眠りをさますために、県下をせまわらなければ

ならなかつた。

X X

第二次世界大戦は、日本に利あらず終戦したが、婦人参政権は意外に早く与えられた。その第一回選挙は昭和二十一年四月十日、全県を一区とする連記制で行なわれた。婦人候補者としてどなたを当てようか。と主として婦選同盟の婦人たちによつて協議を重ねたが、和崎さんは市川房枝氏を輸入して立てようと主張したが、小泉キクエ氏は、人がなければ兎も角として、和崎さんほどの適任者がいるにも拘わらず、輸入候補は見合はずべきであると強く主張し、この主張が絶対的となつて、和崎さんもこれに服し、立候補を承諾するに到つたが、貯金は僅か六百円しかなかつた。全県下をまわる交通費にも食費にも甚だ足りなかつたがみんなが持弁当で運動する外に、応分の負担して婦人代表者の当選を期することを堅く申合はした。

和崎さんが当選したら、秘書になりた。と申出て、和崎さんはいくら断つても、選挙中同行してはなれなかつた女性があつた。横手生れで後に東京に嫁し津村トクさんと云い、和崎さんより稍々年下であるが、和崎さんよりも、もっと太つてゐた。腹ばいになつて寝るくせがあつた。ふぐのようにふくれた腹が押されて、とめどもなく大砲が連発するのであつた。それが旅館に泊つてゐる部屋部

屋に響くのである。少しばかりのことを気にしない百戦錬磨のさすがの和崎さんも、これには弱わり切つて、泊つてゐるお客たちから、代議士候補の和崎という女が、夜寝ると大砲を連発している。とぬれ衣を着せられたくないと思ひ、夜中に起きて、演説を稽古すると称して、廊下をなんべんとなく声を立てながら往來した。自分の部屋から響く際限のない大砲は、同行のものである。と思わせる巧みな弁明法を考えてのことであつた。

X X

それから、下浜方面に遊説に出かける日のことである。小牛に車をひかせ、衆議院議員候補和崎ハル、のほりをなびかせ、秋田市の事務所を出発して、赤十字支部病院前にさしかかつた。そのとなりに進駐軍の宿舎があつた。きつと日本のお嫁の一行と思つて、写真機を持つてとびだして、車をとめて見れば、それは花嫁の車ではなかつた。いささかガツカリして、隊長らしい男が、車をひいてゐる小牛にのつてゐる姿を部下にとらせようとして、小牛にのると、その小牛はベタリとすわつて立たない。降りると起つ。乗るとまたすわる。とうとうあきらめざるを得なかつた。

遊説の一行をのせて、車を引く小牛が進駐軍の一等校が乗つてつぶれるような弱いのではない。日本人は進駐軍のいうことであれば、事の是非を問はず、諾々

ーモニーで多くの人々を感銘させてゐるからである。

すでにイタリヤ、フランス、イギリスなどヨーロッパのほとんどの国に招かれて演奏会を開いて絶賛を博している。日本での演奏会はこんどが初めてだが、ビバルディ、バッハなどのバロックの古典から、フォルトナー、ヒンデミットなどの現代音楽まで広いレパトリーを持つたなかで、秋田ではとくに得意とするモーツァルトを演奏するわけである。

として応ずるのであつたが、小牛は横合いから突然とびだして来た毛色の変つた男のいうことを拒否する態度に外ならなかつたのである。

私の田舎の生家でも、牛や馬を飼つていた。今のようにトラックもなかつたので、二里も遠い市場に米を運ぶには、牛や馬の背をかりるよりなかつた。はじめの若者が米を四俵牛の背にのせて、家を出て一、二町ばかり行つたら、牛はベタリとすわつて、いくらなぐりつけても立たない。それから一計を案じ、わらをたばねて、それに火を点じ、炎々として燃えているこのわらたばを、牛の股に突っ込んだら、牛はビククリして立ち上りそれ以来この若者のいうがままに素直にきくようになった。牛や馬は、人間の地位の高下によつて、その命令に服したり拒否したりする動物ではない。自分の取扱い方に服せざるを得ないものには素直